

カラスガレイ 北西大西洋

Greenland halibut *Reinhardtius hippoglossoides*



(Fisheries and Oceans Canada)

管理・関係機関

北西大西洋漁業機関 (NAFO)

(注) NAFO 条約海域に南北 2 系群あるが、本稿は日本 TAC 枠がある南系群に関する情報。

生物学的特性

■最大体長・体重：雄 90 cm・7.9 kg、雌 109 cm・14.5 kg。

体長は下顎先端～尾鰭基底、体重は全重量（代表的な成長式及び体重・体長関係に基づく）。

■寿命：最大寿命は雄 17 歳、雌 33 歳（研究例）。資源評価では 10 歳以上を Plus group として取り扱う。

■性成熟年齢：雄 9～10 歳、雌 12～13 歳（50%成熟年齢）。

■産卵期・産卵場：周年（夏・秋に多い）。グランドバンク・フレミッシュパス（NAFO 海域 3LM）。

■索餌期・索餌場：秋（10～11 月）に活発。グランドバンク・フレミッシュパス（NAFO 海域 3LM）。

■食性：魚類（タラ、ゲンゲ、シシャモ、アカウオ等の幼魚）、甲殻類（エビ）、頭足類（イカ）等。

■捕食者：シャチほか。

利用・用途

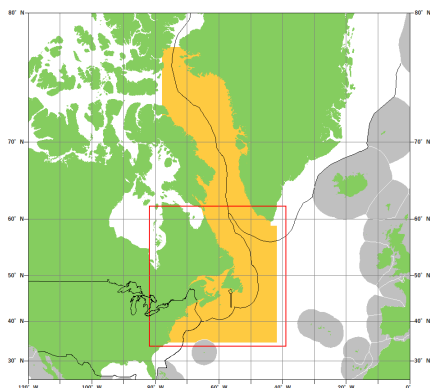
食用（生鮮・冷凍）で販売され、惣菜（煮つけ、ムニエル、ソテー、唐揚げ、刺身）や寿司ネタとして利用。

漁業の特徴

主に着底トロールで漁獲される。NAFO 発足以降 44 年間（1979～2022 年）の平均漁獲量の多い国はカナダ（38%）、スペイン（28%）、ポルトガル（14%）、日本（5%）、ロシア（5%）でこの 5 か国で全体の 91%を占める。

漁獲の動向

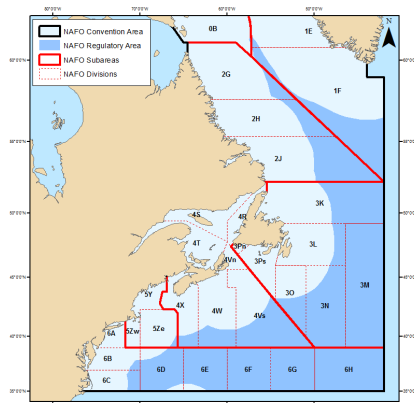
本格的な漁業が開始されたのは 1964 年からで、漁獲量は 4,300 トンから 7 年後の 1970 年に 3.7 万トンとなり 9 倍近く急増した。その後 1978～1980 年、1992～1994 年及び 2000～2003 年にあった 3 回の漁獲量ピーク期（平均漁獲量各 3.5 万、5.4 万、3.2 万トン）以外は、減少傾向が続き現在に至っている。最近 5 年間（2018～2022 年）の平均漁獲量は 1.5 万トンで、3 回目のピーク時の漁獲量の 48%と低いレベルにある。



NAFO 条約海域＝管轄海域（空色）＋EEZ（オレンジ色）

(注1) カラスガレイには南北 2 系群あり、本稿では日本 TAC 枠のある南系群の情報をまとめた

(注2) 赤枠内の詳細は右図



NAFO 条約海域南部の統計海域

南系群操業域＝カナダ EEZ 内（海域 2+3K）＋日本ほか加盟国 TAC 枠のある公海域（3LMNO）

資源状態

最新の資源評価は 2020 年 6 月の NAFO 科学理事会で実施された。本資源評価の目的は、TAC の決定に使用されている管理戦略評価 (MSE) のパフォーマンスをレビューすることである。資源評価は MSE のオペレーティングモデル (OM) で使用されている統計的年齢別漁獲尾数モデル (SCAA) 及び拡張型 SCAA 状態空間モデル (SSM) により実施された。本資源評価は MSE の OM で合意されたベースケースを用いて実施された。両者による資源評価結果に基づく神戸プロットを図に示した (1975~2019 年)。B は漁獲対象 (5~9 歳) 資源量。2019 年の資源状態は両モデル共にイエローゾーンに位置し、乱獲状態であるが ($B_{2019} / B_{MSY} = 0.60 \sim 0.68$)、過剰漁獲ではない ($F_{2019} / F_{MSY} = 0.52 \sim 0.95$)。

管理方策

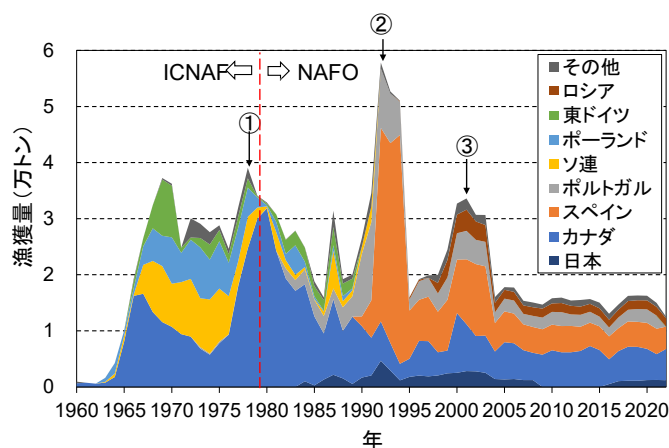
主な管理方策は MSE に基づく漁獲管理ルール (HCR) により TAC を決定している。2024 年の TAC は全体で 15,153 トン (日本割当 1,151 トン)。その他に、VME (脆弱な海洋生態系) 保護のための禁漁海域設置、混獲・投棄規制、漁獲体長最小規制 (30 cm)、網目規制 (130 mm) 等。

カラスガレイ (北西大西洋) の資源の現況 (要約表)

(注) NAFO 条約海域 (南系群) 操業域 (統計海域 2+3KLMNO) の情報に基づく

NAFO 海域における世界の漁獲量 (最近 5 年間)	12,500~16,300 トン 最近 (2022) 年: 12,500 トン 平均: 15,253 トン (2018~2022 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	1,103~1,253 トン 最近 (2022) 年: 1,205 トン 平均: 1,177 トン (2018~2022 年)
資源評価の方法	統計的年齢別漁獲尾数モデル (SCAA) 及び拡張型 SCAA 状態空間モデル (SSM) を用いた解析
資源の状態 (資源評価結果)	神戸プロット黄色ゾーン 乱獲状態であるが ($B_{2019} / B_{MSY} = 0.6 \sim 0.68$)、過剰漁獲ではない ($F_{2019} / F_{MSY} = 0.52 \sim 0.95$) なお、B は漁獲対象 (5~9 歳) 資源量を示す
管理目標	2037 年までに B (漁獲対象資源) を B_{MSY} レベルに回復 (MSE の管理目標)
管理措置	MSE の枠組みで設定された HCR、混獲・投棄規制、漁獲体長最小規制 (30 cm)、網目規制 (130 mm)、VME の禁漁海域設置ほか
管理機関・関係機関	NAFO
最新の資源評価年	2020 年
次回の資源評価年	2024 年以降

* NAFO 条約海域の南系群 (統計海域 2+3KLMNO) に関する内容。2020 年までのデータによる資源評価。

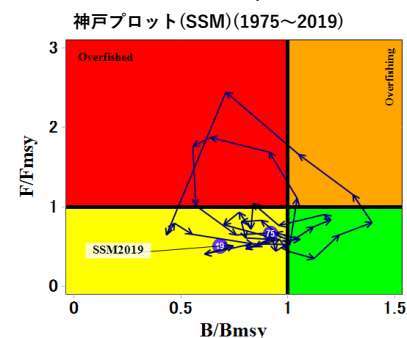
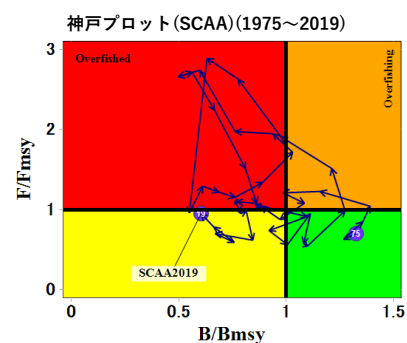


NAFO 条約域 (統計海域 2+3) におけるカラスガレイ国別漁獲量 (1960~2022 年)

(注 1) ソ連は 1991 年まで、1992 年以降ロシア。東ドイツは 1990 年まで、それ以降 (統一) ドイツの操業はない

(注 2) その他 (累積漁獲量順): フェロー諸島、西ドイツ (1990 年まで)、仏領サンピエール島・ミクロン島、ノルウェーほか

(注 3) ①、②及び③は、3 回の漁獲量ピーク年を示す



SCAA と SSM による資源評価結果に基づく神戸プロット